

## 今月のみことば 2018年1月

**「いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」**

**(ルカの福音書13章30節)**

聖書には逆転のドラマが数多く記されている。

長男が重んじられるのはどの文化でもよく見られることであるが、聖書ではその順序が逆転し、次男が上になったりする(カインに対するアベル、エサウに対するヤコブなど)。名君ダビデに至っては八男であったのに、イスラエルの王となった。

イエス・キリストの「山上の説教」においても、この逆転が語られる。

幸いなのは自信にあふれる者ではなく「心の貧しい者」(自らの心の貧しさを知る者)であり、得意になる者ではなく「悲しむ者」(自分の罪に悲しむ者)であり、地を嗣ぐのは勝ち組ではなく「柔和な者」(争わず、損な役割を引き受ける者)だというのだ。

この逆転の背後にあるのは、神の原則があるからである。

「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与えられる」と聖書ははっきり述べる( I ペテロ5:5)。

イエス・キリストは、当時の権力者や道德家、宗教の指導者たちではなく、彼らが軽蔑してやまない取税人や遊女たちが天の御国に先に入るとさえ言われ、人々の度肝を抜いた。

それらの、いわば失敗者たちこそが、いち早く自分の弱さを悟り、そんな自分を愛して人生を再生してくださる神をイエス・キリストの中に見たのである。

キリスト教信仰はパウロを抜きに語ることはできない。しかし、そのパウロも、徹底的に神の前に砕かれなければならなかった。彼は当時のエリートの一で、ユダヤ教の将来を託されていたような人物であった。十字架刑に処せられたナザレのイエスをメシアと信じる者はユダヤ人の風上にも置けないと、クリスチャンたちを迫害しているさなか、まばゆい光に打ちのめされ、自分がとんでもない思い違いをしていたことを悟った(使徒9章)。先頭を走っていたと思っていた自分が実は逆走し、神に逆らう罪を犯していたのである。



後年、パウロは、新約聖書に収められることになる手紙の中で自らを「使徒の中で一番小さな者」と述べたが、その後、「聖徒の中で最も小さな者」と言い、晩年には「罪人のかしら」と自らを呼んだ。

そのパウロがその後の世界を変えるほどの大きな働きを神にあってなすことになろうとは、本人も予想していなかったことであった。

賢者ソロモンは次のように記す。

「わたしはまた日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのもない。また賢い者がパンを得るのもなく、さとき者が富を得るのもない。また知識ある者が恵みを得るのもない。(伝道者の書9:11口語訳)

失敗や失望も、私たちが神のみもとに導く道具となるなら、何と幸いなことだろう。そこにはだれも目をくれなかった宝が隠されているからである。

